

東京の人口構造の変化を読み解く—「新たな東京集中」に着目して

西田穰（地域計画研究所）

(1) 現在の東京都の人口は約 1,339 万人

戦前の東京の人口は約 730 万人であったが、戦災を受け、1945（昭和 20）年には 380 万人弱までに減少する。戦後、東京は目覚ましい復興をとげ、1955（昭和 30）年には戦前の人口を回復するとともに、高度成長期には全国から人口が流入し、1963（昭和 38）年に 1 千万人を越す。その後、東京都区部の人口は 1966（昭和 41）年の 889 万人をピークに減少に転じ、多摩地域の人口増加は続くが、都全体の人口もほぼ平行状態になる。

しかしながら、区部の人口は 1996 年を境に再び増加に転ずる。現在ではピーク時の人口を上回る 915 万人に達しており、1966 年から 1996 年の 30 年間に減った約 100 万人の人口を 20 年弱で取り戻し、さらに増加する傾向を見せている。なお、多摩地域の人口は一貫して増え続けているが、徐々にその増加率はゼロに近づいてきている。

これらの経緯を経た 2015 年 1 月 1 日現在の東京都の人口は、約 1,339 万人となっている（図 1）。

(2) 年齢構成は高齢者側へシフトしている

東京都区部について年齢構成の変化を見ると、1975（昭和 50）年には 20 代にあった大きな山が、2005 年には 20 代と 40 代の二山になり、子どもの数が大幅に減少する。現在（2015 年）は若者の山もほぼなくなってしまっていて、60 代後半（団塊の世代）と 40 代前後（団塊ジュニア層）の山になっている事が分かる（図 2）。

図 1 東京の人口の推移

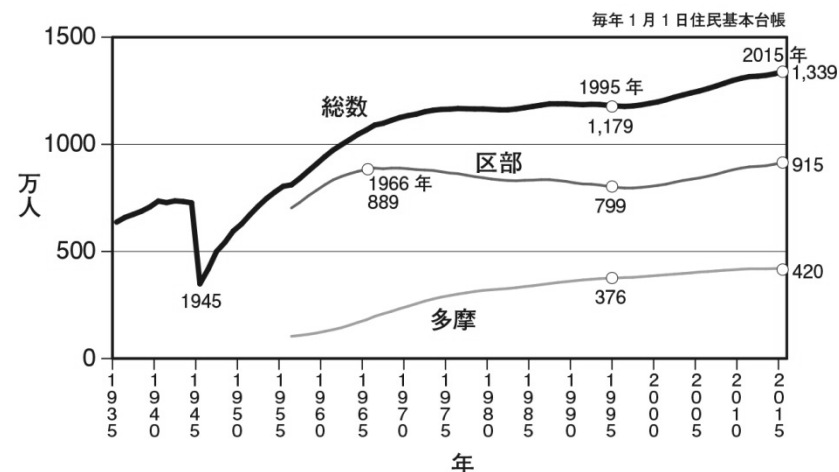


図 2 東京都区部年齢構成グラフ (1975-2005-2015)

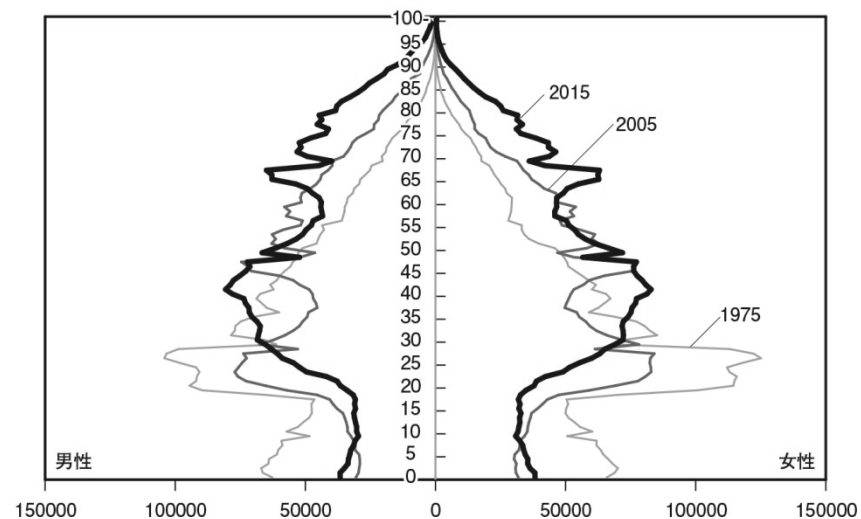
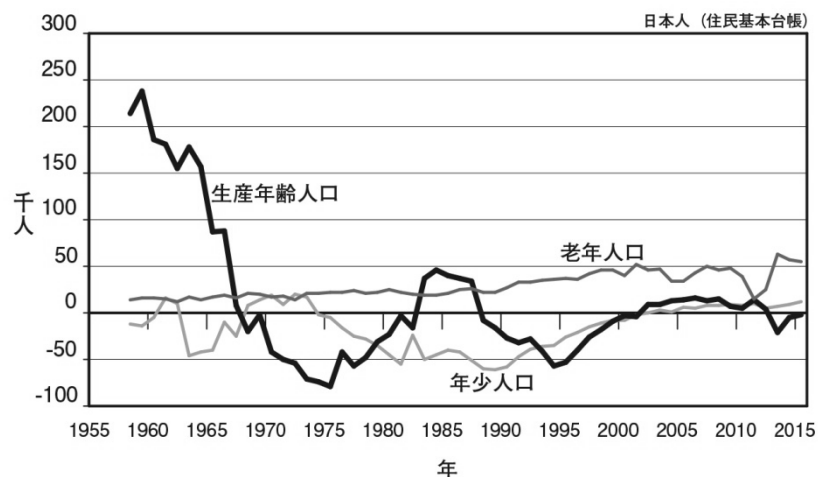


図 2、4、5 については各年国勢調査データによる（2015 年のみ住民基本台帳）。

この傾向を確かめるため三区分別人口の各年の増減を見ると、老年人口（60歳以上）は一貫して伸びているのに対し、生産年齢人口（15-59歳）は人口急増期に大きく伸びたものが、減少-増加-減少という変化を経てほぼゼロに近づいている事が分かる（図3）。紙幅の都合上、データの紹介は割愛するが、多摩地域についても上記の傾向は大きく変わらず、区部の動きを少し遅れて追いかけているように見える。

ただ、1970年代以降減少を続けてきた区部の年少人口（14歳未満）が、ここ15年ぐらいは増加傾向にある事は、高齢化が進む東京にとって光明となるのではないだろうか。

図3 三区分別人口の増減数（区部）



(3) 人の流れはどう変わったのか

ところで、東京都区部の人口がピークの頃の人口構造の変化と今の状況の違いは何か？ 各10年間の構成変化を読み解くと、次のようになる。

1975（昭和50）年と1985（昭和60）年の区部の人口構成を比較すると、形は少し変わるが両者ともに20代に大きな山がある事が分かる（図4上）。このグラフの1975年のデータを10歳分上方にずらして1985年のデータに重ねてみると、1975年に20代だった人達の半数近くは流出し、新たに20代が流入してきており、区部の人口は、そのまま上にシフトしている人口層（定住者）と流動する若者層の二つで構成されていた事が分かる（図4下。この時期、中年層と子ども＝世帯形成層の流出も起きていた事が分かる。高齢者については死亡による人口減である）。

一方、近年の動き（2005年と2015年）について見ると、若者の山はなく、10年間で単純に上方シフトが起きている（年齢が10歳進んだ）事が明らかである。またそれと共に、若者層の人口流出が無いまま、20代の人口が流入している事に注目する必要がある（図5）。

これが、区部の人口が増加に転じた大きな要因であり、特に近年の東京一人勝ち現象を背景にした「新たな東京集中」を示すものである。

※本稿は西田穰「東京の人口構造の変化を読み解く—消費者像の変化と生協への提言」（『まちと暮らし研究』No.22（2015年12月）87-99頁）の一部に加筆修正を加えたものです。

図4 東京都区部年齢構成グラフ (1975-85)

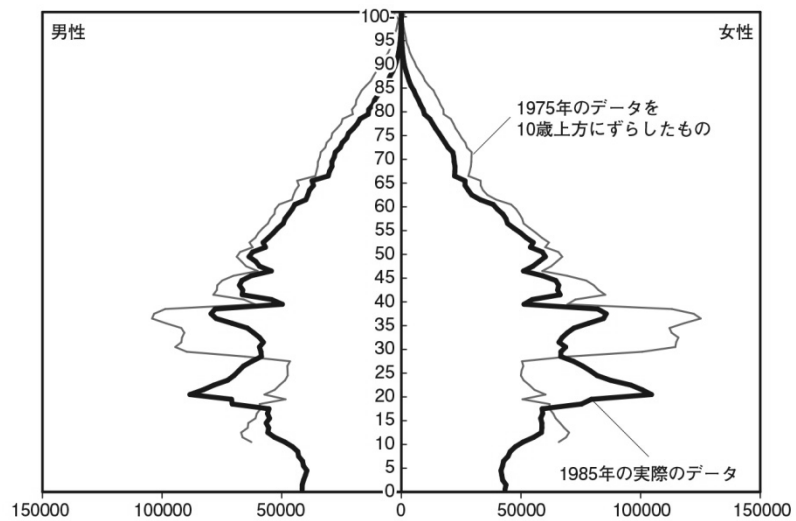
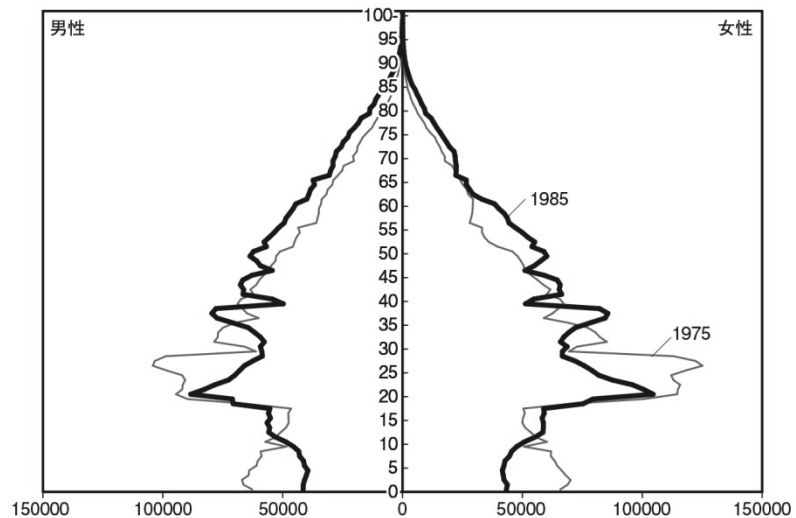


図5 東京都区部年齢構成グラフ (2005-2015)

